

第 97 回 2011 年「世界難民移住移動者の日」教皇メッセージ

親愛なる兄弟姉妹の皆様

世界難民移住移動者の日は、拡大しつつある移住現象にかかわるテーマについて熟考する機会を全教会にもたらすとともに、キリスト者としてのもてなしにむけて、また、正義と愛に満ちた世界の構築にむけて心を開くよう祈る機会も与えてくれます。正義と愛は、真正で永続的な平和を築くために欠かせない柱なのです。「わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい」（ヨハネ 13・34）とは、わたしたちに力強く語られ、わたしたちをたえず新しくする主の招きです。御父が最愛の御子のうちに愛される子どもとなるよう招いているということは、キリストにおいて互いを兄弟姉妹として認め合うよう招いているということでもあります。

この全人類の間の深いきずなが、今年の考察のテーマとした「一つの人類家族」の原点です。それは、これまで以上に多民族と諸文化が共生し、さまざまな宗教の人々が対話に参加するよう促される社会の中にある、兄弟姉妹という一つの家族です。こうして、しかるべき相違点を尊重した平穏で実り豊かな共存関係が実現するのです。第二バチカン公会議は次のように断言しています。「神は全人類を地上の至るところに住ませられたので（使徒言行録 17・26 参照）、すべての民族は一つの共同体をなし、唯一の起源を有する。また、すべての民族は唯一の終極目的をもっており、それは神なのである」（第二バチカン公会議『キリスト教以外の諸宗教に対する教会の態度についての宣言』1、教皇ベネディクト十六世「2008 年『世界平和の日』メッセージ」1）。「神の摂理といつくしみのあかし、さらに救いのはからいは、すべての人に及ぶ」（第二バチカン公会議『キリスト教以外の諸宗教に対する教会の態度についての宣言』1）。したがって、「わたしたちは偶然、人々とともに生きているのではありません。わたしたちは皆、人間として、それゆえ兄弟姉妹として、共通の道を歩んでいます」（教皇ベネディクト十六世「2008 年『世界平和の日』メッセージ」6）。

生きるという道は同じでも、わたしたちがたどる道のりの状況は異なります。多くの人が国内または国外、永続的あるいは季節的、経済的あるいは政治的、自発的あるいは強制的といったさまざまな形で、移住という苦しい経験に直面しなければなりません。人々はそれぞれの場面で異なる形の迫害を受け、脱出する必要に迫られ、祖国を去ります。さらに、現代の特徴であるグローバリゼーションという現象は、社会的、経済的なプロセスであるばかりでなく、地理的、文化的な境界を越えて「人類自身がますますかわり合うようになる」ことも意味します。このことに関して、教会は次のことを思い起こさずにはいられません。このきわめて重要なプロセスの深い意味とその根本的な倫理基準は、人類家族の一致と、よいものにむけた人類の発展によってもたらされます（教皇ベネディクト十六世回勅『真理に根ざした愛』42 参照）。したがって、教会の社会教説が説いているように、移住者も、彼らを受け入れる地元の住民も、だれもが一つの家族の一員であり、だれもが普遍的な目的を持つ地上の富を享受する同じ権利を有します。そこに、連帯と分かち合いが生まれるのです。

「ますますグローバル化する社会において、共通善とその達成のための努力は、地上の国が一致と平和の中で形成され、分裂のない神の国のある程度の実現と先取りとなるよう、人類家族全体、すなわち、諸民族、諸国民から成る共同体の全体に及ぶものでなければなりません」（教皇ベネディクト十六世回勅『真理に根ざした愛』7）。これは、移住という現実に対する視点でもあります。かつて、神のしもべ教皇パウロ六世が指摘したように、「個人どうし民族どうしの兄弟愛の欠如」（教皇パウロ六世回勅『ポプロールム・プログレシオ』66）は実に、低開発の根底にある要因です。それは移住現象に大きな影響を及ぼしているともいえるでしょう。人間の兄弟愛とは、一つになるつながりを、つまり自分とは異なる他者との深い結びつきを、ときに驚嘆するほどに体験することです。このことは、人間であるという単純な事実に基づいています。責任をもって兄弟愛のうちに生きるとき、兄弟愛は交わりの生活をはぐくみ、すべての人、とくに移住者との分か

ち合いを促します。兄弟愛は、他者の善のため、地域、国家、世界中の政治共同体のすべての人の善のために、自らを他者に与える力となっているのです。

2001年の世界難民移住移動者の日にあたり、敬愛すべきヨハネ・パウロ二世は、次のように強調しました。「普遍的共通善は、諸民族から成る人類家族全体を、あらゆる国家的エゴイズムを超えたところで包み込むものです。このような文脈の中に、移住の権利があるのです。教会は、あらゆる人に、自分の国から出る可能性と、よりよい生活条件を求めて他の国に入る可能性の両面があることを認めています」(教皇ヨハネ・パウロ二世「2001年『世界難民移住移動者の日』メッセージ」3。教皇ヨハネ二十三世回勅『マーテル・エト・マジストラ』30、教皇パウロ六世使徒的書簡『オクトジェジマ・アドヴェニエンス』17 参照)。それと同時に、国家は、人間一人ひとりの尊厳への尊重をつねに保障し、移住動向を管理し、自国の国境を守る権利を有します。さらに、移住者には、受け入れ国の法律と国民性を尊重して、その国になじむ義務があります。「その課題は、すべての人、とくに貧しい人々を迎え入れることと、元から住んでいる人と後から加わった人がともに尊厳ある平和な生活を送るために必要なことの評価を結びつけることにあります」(教皇ヨハネ・パウロ二世「2001年『世界平和の日』メッセージ」13)。

このような文脈において、他のあらゆる民族の中で歴史を旅する神の民としての教会の存在は、信頼と希望の源です。実に教会は「キリストにおけるいわば秘跡、すなわち神との親密な交わりと全人類一致のしるしであり道具」(第二バチカン公会議『教会憲章』1)です。また、聖霊によって行われる教会内の活動における「全人類の兄弟的集まりを確立する努力は、むなしなものではない」(第二バチカン公会議『現代世界憲章』38)のです。まさに聖体が、教会の中心において全人類の交わりの尽きることのない源となっています。それゆえ、神の民は「あらゆる国民、種族、民族、言葉の違う民」(黙示録 7・9)を、教会の権力などではなく、愛の崇高な奉仕によって包み込むのです。事実、愛の実践、とりわけもっとも貧しく弱い人々のためになされる愛の実践は、感謝の祭儀が真正なものであるかどうかを判断するための基準です(教皇ヨハネ・パウロ二世使徒的書簡『主よ、一緒にお泊まりください』28 参照)。

難民とその他の強制移民は、移民現象の重大な部分を占めています。彼らの状況は、とりわけ「一つの人類家族」という主題に照らして考察されるべきです。暴力と迫害から逃れてきたこれらの人々のために、国際共同体は確かな取り組みをしてきました。彼らの権利を尊重し、安全性と社会的融合に適正な配慮を向けることにより、安定し調和のとれた共存が促されるのです。

さらに、移住を余儀なくされた人々との連帯も愛の「積み重ね」によって養われます。愛は、わたしたちが自らを一つの人類家族と考えること、そしてキリスト者が自らをキリストの神秘体の構成員と考えることによって生まれます。事実、わたしたちは互いに支え合っています。わたしたちは皆、人間として兄弟姉妹に責任があり、信仰において信者に責任があります。以前、わたしが申し上げた通りです。「難民を受け入れ、手厚くもてなすことは、すべての人が人間としてなすべき連帯の行為です。それは、難民が不寛容や無関心によって疎外感を感じることがないようにするためです」(教皇ベネディクト十六世「一般謁見演説(2007年6月20日)」Insegnamenti II, 1 [2007], 1158)。このことは、自らの故郷や祖国を追われた人が、平和と安全のうちに生活する場所、そして彼らが働き、受け入れ国で権利を行使し、義務を果たす場所を見いだすよう助けられ、生活における宗教的側面を忘れることなく共通善に貢献することを意味します。

最後に、留学生への特別な思いを、再び祈りのうちに述べたいと思います。広大な移住現象の中で、彼らの存在も大きくなりつつあります。未来の指導者として彼らが祖国に帰国することを考えると、この現象も社会的に重要です。彼らは母国と受け入れ国の間の文化と経済の「架け橋」となります。こうしたすべてのことが、まさに「一つの人類家族」を築く方向へ向かっています。ですから、留学生のための取り組みを支援し、彼らの現実的な問題、すなわち経済的困難、社会や大学においてまったく異質な環境に直面する中で孤独を感じる苦難、さらに打ち解けることの困難さにも注意を向けなければなりません。このことに関して、わたしは次の言葉を思い起こしたいと思います。「大学という共同体に属することは、……現代世界を形成してきた文化の岐路に立つことです」(教皇ヨハネ・パウロ二世「教皇庁定期訪問中のシカゴ、インディアナポリス、ミルウォーキー教会管区のアメリカ司教団への演説(1998年5月30日)」6: Insegnamenti XXI, 1 [1998], 1116)。学校と大学で新世代の文化は形成されます。多様性を持ちながらも一つとなるよう求められる家族として人類を理解する能力が育つかどうかは、これらの機関にかかっているのです。

兄弟姉妹の皆様、移住者の世界は広大かつ多様です。そこには、素晴らしく希望に満ちた体験があると同時に、残念ながら、悲劇的で人間にも市民社会にもふさわしくない多くのことがらがあります。教会にとって、こうした現実現代を如実に表すしるしです。それは、一つの家族を形成するという人類の使命にさらに光をあてると同時に、人類を結びつけるかわりに分断し、分裂させる問題点も際立たせます。希望を失わず、すべての人の父である神とともに祈りましょう。民族、文化間の理解と互いに尊重し合う心を深めるために、わたしたち一人ひとりが自ら、社会、政治、組織的なレベルで兄弟としてつながることのできる人となるのを助けてくださいますように。これらの希望とともに、海の星である聖母マリアの取り次ぎを願いつつ、すべての人、とりわけ移住者、難民、そしてこの重要な分野で働くすべての人に、わたしは心から使徒的祝福を送ります。

カステル・ガンドルフォにて

2010年9月27日

教皇ベネディクト十六世

(翻訳：日本カトリック難民移住移動者委員会)

「復活の主日にあたって」池長会長談話

日本のカトリック教会の皆様

主のご復活おめでとうございます。

大自然も新しい生命のあふれに満たされて、神がそなえて下さった救いの恵みをたたえているように思われます。

あの悲惨を極めた東日本大震災から40日余りが経過いたしました。しかし、今なお多くの方々が住み家も奪われたまま、避難生活を送っておられます。さらに、放射性物質の汚染により、あらたに住み慣れた町や村を離れて安全な地域に移らざるをえない人たちもおられます。

他方、この大震災と大津波の結果、私たちが通常味わうことができない大きな感動も体験することができました。震災による甚大な被害が報道されると同時に、アメリカ、韓国その他世界の国々から、日本、とくに被災地の方々に心のこもった励ましが寄せられました。日本のための集会在呼びかけられ、そこでさまざまなエールが発せられた上に、義援金が集められて送られてまいりました。

お隣の韓国で、たちまち路上で多くの人たちが結束して、プラカードに英語で日本への愛と力強い励ましの言葉が掲げられた場面や、アメリカから軍隊の方々が大勢馳せつけて下さり、大津波に破壊され、混沌とした土地で救援活動を続けて下さったこと、イスラエルから医師団が大挙して治療に来て下さったことなど、いくつも心を打たれた場面に会わせていただきました。個人的な義援金のご寄付に関しても、感動的な例にいくつも触れさせていただきました。

被災地の慰問についても、心を動かされる場面がたくさんありました。公的なものから個人的なもの、また団体によるものと、さまざまですが、その中に、心の真実が伝わってくるものにはすべて、心底から感動いたしました。

ともすれば埋もれてしまいがちなエピソードも、拾ってゆくとさまざまなものがあります。たとえば、佐藤さんという方が夢中で研修生として来ていた中国人の方々を小高いところに逃げるように指示し、20人以上の命を救いながら、自分は逃げ遅れて亡くなってしまわれたことも伝え聞きました。

さて、今なお、危険な放射能の中を、放射性物質の放出を防ぐために働いておられる作業員の方々、また、生業を奪われたまま、いつまでこの状態が続くかも分からずにおられる漁業や農業の方々、さらに避難を強いられ、将来の復帰の見通しのつかないの方々、工場や事業所、企業の営みが絶たれて、いつ回復できるかの目途の立っていないの方々など、長い間艱難の中に置かれ続けている方々のために、私たちは祈り続ける必要があります。瓦礫（がれき）撤去や行方不明者の救出、捜索を続けて下さっている方々のためにもお祈りいたしましょう。

4月17日の東京電力の発表によって事故収束への工程表が示されました。6～9ヶ月で原子炉を安全な状態で停止する見通しが立ったということです。明るい光がさし出したと言えますが、これが予定通りはかどるためにも祈りましょう。

教皇様もずっとご心配下さっておられ、5月13日から17日にかけて、教皇代理としてサラ枢機卿様が日本に来て、現地の視察と現地でのミサをされることになっています。この機会に、日本の司教様たちも現地に行かれます。

最後になりましたが、仙台教区から緊急依頼が来ています。教区が立ち上げた救援サポートセンターに至急、ボランティアで、スタッフになれる人を送ってほしいということです。サポートセンターは、教会のために働くものではなく、一般の人々や被災地のために活動するセンターです。本部と前線基地（3ヶ所）のセンターに分かれています。双方のためにスタッフとして、そこでリーダーシップをとれる人が必要です。1ヶ月以上とどまれる人であることが望まれています。6ヶ月でも1年でもとどまれる人ならば、さらに助かるでしょう。後者の場合は、施設などが、有給休暇を与えて派遣しなければ不可能かもしれません。しかし、カトリック教会も、こういう時こそ自己犠牲を払っても救援に協力する機会ではないでしょうか。司教協議会会長としても、全国のカトリックの皆様呼びかけたいと思います。

世界中の教会が、今日本のために祈って下さっています。世界の人々の深い絆に感謝し、本来あるべき人と人とのつながりをさらに深めることができるよう、私たちもできる限りの努力をいたしましょう。

皆様もよきご復活節をお過ごしください。

2011年4月24日 復活の主日に
日本カトリック司教協議会会長
大阪大司教 レオ池長 潤

「東日本大震災被災者のための祈り」訂正のお願い

日本カトリック司教協議会会長、池長潤大司教様の震災直後のメッセージに掲載されました「祈り」を日本全国で継続的にお使いいただいているとうかがっており、たいへんうれしく思っております。ただ、この祈りは急いで作成したため形の整っていないところがありました。大司教様の了解を得て、今後の使用のために訂正版を掲載させていただくことにしましたので、今後はこちらの祈りをお使いいただきますよう、お願い申し上げます。

あわれみ深い神さま、
あなたはどんな時にも私たちから離れることなく、
喜びや悲しみを共にして下さいます。
今回の大震災によって苦しむ人々のために
あなたの助けと励ましを与えて下さい。

私たちもその人たちのために犠牲をささげ、祈り続けます。
そして、一日も早く、安心して暮らせる日が来ますように。
また、この震災で亡くなられたすべての人々が
あなたのもとで安らかに憩うことができますように。
主キリストによって。アーメン。
母であるマリアさま、どうか私たちのためにお祈りください。
アーメン。

2011年4月20日

カトリック中央協議会事務局長
前田万葉